第25号
2020.3

青少年赤十字
賛助ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手をとりあい、研鑽に努める。

発　行　広島県青少年赤十字賛助奉仕団　〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
事務局　日本赤十字社広島県支部　ＴＥＬ（082）545－5011

青少年赤十字の活躍に寄せて

広島県教育委員会教育長　平川理恵

青少年赤十字におかれましては，赤十字の理念である「人道」を自己の価値観とし，世界の平和と人類の福祉に貢献できる青少年の育成を目的に、学校教育の場において体験を重視した活動を展開しておられますことに深く敬意を表します。

また、関係者の皆様におかれましては、平素から本県教育の充実に貢献していただいておりますとともに、加盟校におかれましては、子供たちの人間尊重の精神や社会の一員としての責任と自覚を養い、異なる文化や習慣を越えて世界の仲間と仲良く生きる力の育成に御尽力いただいておりますことに感謝を申し上げます。

さて、平成29年告示の学習指導要領では、災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成していくことができるよう、各学校の特色を生かした教育課程の編成を図ることが示されています。未来を担う子供たちは、自然災害の正しい知識をもち、自ら考え、判断し、危険から身を守る行動をとることが必要であり、青少年赤十字が進めておられる「気づき、考え、実行する」という態度目標に基づく防災教育は、児童生徒が主体的に取り組む中で知識と行動力を身に付けることができるという点で、新しい学習指導要領で求められる資質・能力の育成につながるものです。

県教育委員会では、平成26年に策定した広島版「『学びの変革』アクション・プラン」に基づき、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な人々と協働して新たな価値を創造することのできる人材の育成を目指した教育を進めています。加盟校の皆さんは、ボランティア活動や国際交流などに取り組み、自ら課題に「気付き」、その原因や解決のための道筋を「考え」、問題解決のために「実行する」ことに取り組まれており、このことは「『学びの変革』アクション・プラン」とも軌を一にするものです。今後もぜひ、「気づき、考え、実行する」力を生活の中でも生かしながら、周りの人たちと共に生きることの大切さを広げていただきたいと思います。青少年赤十字活動の更なる発展と加盟校の広がりに向け、皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

青少年赤十字の「もっとみえる化」を

日本赤十字社広島県支部事務局長　泉水　直

賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、一昨年7月の記録的な豪雨災害は、広島県を始め、西日本の広範囲に渡り甚大な被害をもたらしました。また、昨年後半も、何度となく台風の発

生により、全国で大きな被害が発生しました。

県内の赤十字加盟校におかれましては、災害発生直後から、生徒・児童自ら、自分たちに何ができるかを考え、「人間の命を救いたい」、「困っている人を助けたい」という人道の精神のもと、積極的に募金活動やボランティア活動を行って下さいました。

皆様のこうした活動に感謝申し上げるとともに、これもひとえに賛助奉仕団や指導者の先生方の平素からのご指導の賜物と感じている次第です。

こうした青少年赤十字の活動を通して、人の苦しみや痛みに「気づき」、同じ人間としてどうすればよいかを「考え」、自分に出来ることを、勇気を持って行動する「実行の人として」、是非とも、成長していただきたいと願っています。

広島県支部としては、こうした様々な青少年赤十字の活動を、幅広く県民の皆様に、より理解し周知していただくため、「赤十字のもっと見える化」を図ることにより、加盟校がますます拡大し、青少年赤十字の輪が一層広がっていくことを期待しています。

また、今後は、地域の奉仕団等ボランティアの方々の協力も仰ぎながら、地域社会とのつながりを体感できる新たな青少年赤十字の指導法や活動等の導入にもチャレンジしていきたいと考えているところです。

青少年赤十字の活動期間は決して長くはありませんが、優しさや思いやりといった根底の部分は、青少年の皆さんが今後生きていく上での大きな糧となるものと信じています。

広島県支部としても、賛助奉仕団の皆様と密接に連携し、青少年の育成を全力で支援して参りたいと考えています。今後とも、青少年赤十字活動の更なる飛躍に向け、皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

青少年赤十字活動の活性化について

委員長　日高敬司

広島県の青少年赤十字活動が一つの岐路に立っていると考えます。近年の傾向として、小学校の児童数が激減し、そのため学校の統廃合が進み、それを契機に加盟を取りやめる現象が見られています。

一方、高等学校は平成28年度に高校総合文化祭（総文祭）が広島県で開催され、数多くの高校生が広島に参集しました。中でも青少年赤十字・ボランティア部門は広島県ＪＲＣクラブ連名の生徒・教職員が数年にわたって準備し、無事成功させました。これを契機に加盟校でない学校もボランティア活動しているクラブ等への働きかけが功を奏して連携がすすみ、ＪＲＣクラブでない学校もトレセンや県大会に出席して大変盛況の状況にあります。そのうえ、高校では新しく救急法競技会などを開催し、そのための研修を校内で実施し、県競技会へ臨んでいます。このことの背景には平成26年・平成30年に襲った大水害に高校生がボランティアで復旧活動等で活躍し、問題意識が高まっていることもあります。

また、今年は地域奉仕団（呉赤十字奉仕団、三和赤十字奉仕団、東広島赤十字奉仕団）から学校へ積極的なアプローチがあり新たに加盟校が続々誕生しています。実は、地域と学校との連携は防災・防犯など密接な関係があり、災害県とも言える広島県では特に重要なことで、いわば今年は地域奉仕団とＪＲＣコラボレーション元年ともいえます。

青少年赤十字活動は高遠な精神のもと、方法論は温故知新、新たな創造や地域を巻き込んだ活動にしていくことで、それが新たな伝統となっていくと考えます。われわれ賛助奉仕団も知恵と汗をより一層絞り出し支援してまいりたいと考えています。

（実践報告）

「保育園でのＪＲＣ活動について

社会福祉法人光生会初神保育園　保育士　益本彩子

初神保育園の赤十字の活動は、みんなのお役に立てることとして、エコキャップ活動（募キャップ）と1円玉募金を行っています。毎日、5のつく日に個人で作った赤十字の箱に入れて持ってきています。エコキャップは、ワクチンになることを知り、協力的に持ってきています。

そして、5のつく日の朝の会で、赤十字の旗を揚げ、赤十字の歌、赤十字のやくそくを唱えています。また、幼児組は、落ち葉を集めて園を掃除して子どもたちと一緒にきれいにしています。

最後に、保育園では手づくりの菜園があります。食べもの生きものに感謝して、園の畑で採れたての野菜を給食で頂いています。

「やさしさ」や「思いやり」の心を育てる青少年赤十字活動

安芸郡熊野町立第四小学校
養護教諭　稲垣直美

●青少年赤十字との出会い

今から約二十年前、赴任した学校が青少年赤十字の加盟校となったのを契機に、救急法指導員の資格を取得し、健康安全プログラムの普及に微力ながら努めてきた。赤十字の基本理念である「人道」の価値を広げるためには、青少年赤十字の活動が重要な位置を占めている。人として優しく、思いやりをもって行動できる子供達を育てたい…青少年赤十字との出会いが自己成長の糧になっていることは確かである。

●本校に赴任して

熊野第四小学校に赴任した1年目に西日本豪雨災害が発生した。校区内で土砂災害が起こり、大切な子供達や地域が被害に遭った。実際に災害を目の当たりにし、改めて命を守る行動をとる防災教育の必要性を痛感した。

そこで、令和元年度は、学校評価の中に防災教育の充実を図る目標を掲げ、年間を通して防災教育・避難訓練を実施した。青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのちひろめるぼうさい」を活用し、日常的に自分の命を守る行動の仕方を身につけさせることにより、目標値を達成することができた。今後も青少年赤十字が行う防災教育「先見、気づき、考え、実行する」を礎に取り組んでいきたい。

地震ダンゴムシのポーズ

●「熊野町赤十字祭り」を通して

安芸郡熊野町は、全ての保・小・中・高等学校が青少年赤十字に加盟している。平成19年度に熊野町青少年赤十字連絡協議会が発足し、赤十字及び青少年赤十字の活動を町民に広く啓発することを目的として、年1回、熊野町赤十字祭りが開催されている。

令和元年度の熊野町赤十字祭りは、１４７名の参加者と52名スタッフの支えで盛大に開催された。異学年のチームに分かれての防災体験活動が中心となったが、ハイゼックスを使用した非常食作り、簡易トイレ・新聞紙スリッパ作り、災害時の食育学習、身近な物を使用した救急法、幼児の防災教育、レクリエーション……多くの体験活動を通して、防災の力を身につけるとともに、参加者同士が協力し、温かい思いやりの心を育む様子がみられた。

これからも熊野町赤十字祭りが、他者への優しさや思いやり、命の大切さを学ぶ機会となってほしい。そして、熊野町全体に優しさや思いやりの花が咲き乱れることを願っている。

「熊野町赤十字祭り」災害ねこまんま作り

平成30・31年度青少年赤十字研究推進指定校について（報告）

呉市立仁方中学校　教諭　中川　雄貴

呉市立仁方中学校は、「生徒会執行部を中心とし、生徒一人一人が主体的に『気づき・考え・実行する』ことができる自治的な生徒会活動の実践を目指す」ことを研究主題とし、2年間の研究推進指定校として活動を行ってきました。

加盟校としては年数が浅い学校ですが、研究推進にあたり、これまで行ってきた奉仕活動や健康・安全に関する活動等を教師主体ではなく、生徒主体の計画的・継続的な活動とするために、生徒会執行部や生徒委員会活動を活性化し、一つひとつの活動の意味を考え、社会に貢献できる生徒を育てることを目的に掲げて、特に自発的なボランティア活動を通して、自己有用感や自己肯定感の育成を図ること、地域の一員として自覚し地域に貢献する心が育成されること等を狙いとして実践しました。

まず、日常的に行うあいさつ運動やなボランティア活動、清掃活動等はＪＲＣの理念を意識して取り組むことから始めました。特に今年度の文化祭では、生徒会執行部を中心で「赤十字と青少年赤十字について」のステージ発表や活動展示を行いました。ステージ発表は「赤十字の父　アンリー・デュナン」と題し、執行部と代議員で創作劇を実施しました。

文化祭・創作劇「赤十字の父　アンリ・デュナン」

ＪＲＣ活動については、執行部でプレゼンテーションを作成し、わかりやすく説明しました。各委員会では、本校での取り組みのまとめや、避難食・防災グッズ等の展示・ペットボトルキャップ集めについてなど、テーマ別にポスター・展示発表を行いました。　さらに昼休憩時間を活用して、今年度発生した国内の大規模災害の被災地への義援金として、募金活動にも取り組みました。保護者や地域の方々へ生徒の学校での取り組みや赤十字活動の啓発ができ、文化祭への取り組みは一つの成果だと思っています。

また、環境整備にも力を入れて取り組みました。学校を花いっぱいにしようと、秋のある日曜日にトイレ掃除と花植ボランティアを募集して実施したところ、生徒はもちろん、保護者や市内の赤十字奉仕団の方々も参加していただきました。生徒に花の植え方を指導してくださいました。そのお陰で玄関や体育館周りにビオラが咲き誇り、春先まで美しい学校環境を整えてくれています。

この2年間の取り組みを通して、赤十字の精神に基づき、日常生活の中での実践を通じて、「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」の3つの実践目標達成のために、今後も生徒達とともにＪＲＣ活動の活性化を図っていきたいと思っています。

広島県高等学校救急法競技大会について

県立安芸高等学校　教諭　前平芳延

本年度も、青少年赤十字県大会において、救急法

競技大会を開催することができた。昨年に続き２回目で、参加した生徒だけでなく、審査にあたっていただいた指導員の方々、周りで見守った県大会参加生徒などが、真剣な雰囲気を作り出し、競技大会としても、赤十字活動を真剣に取り組む上でも、有意義な空間と時間を作ることができた。本大会は、県大会の分科会で行っているが、同時に広島県高等学校文化連盟の総合文化祭ＪＲＣ・ボランティア部門大会として、毎年行われる全国総合文化祭ボランティア部門への出場校を決める大会としても位置付けている。

救急法競技会（ＡＥＤ・心肺蘇生法）

きっかけは、昨年度の夏のトレセンに向けての打ち合わせの席での賛助奉仕団の日高先生の「高校生が行う救急法大会を」という発案だった。例年高校トレーニングセンターで行っている救急法の中身をさらに県大会でもというものである。このアイデアに賛同するとともに、平成28年の「ひろしま総文」をきっかけに、その後、宮城大会に参加し、長野大会を控えていた時期でもあり、総文出場校を選抜する仕掛けとして、活動報告ともう１本の柱として「あり」だと考えた。この年の夏は西日本豪雨の影響で、トレセンも中止となったが、安芸高校の米澤君の発案で行ったボランティアフェスティバルと、支部で行われた救急法大会にむけた学習会で、支部の西本さんや野田先生の指導の機会を設けることができ、初めての大会を試行錯誤で実現することができた。想像以上に高校生メンバーは前向きに、いい意味で面白がって取り組んでおり、学期ごとの総会と夏冬の献血活動に加えて、救急法という新たな共通の目標ができ、高校協議会の新たな柱になったと感じた。救急法大会を含めた活性化で、広島近辺だけでなく、東部も含めた地域からの県大会参加が定着しており、生徒にとっても刺激になっている。

本校では本年度、「学びの時間Ⅱ（総合的な学習の時間）」という授業を使い、赤十字救急法講座を設定し、普段活動してる部員だけでなく、興味を持った一般の生徒にも学んでもらう試みを行った。看護師や自衛官などを目指す生徒や、興味本位の者も含め、真剣に、そして目を輝かせながら受講してくれている姿を見ると、青少年赤十字活動が、さらに普及する可能性を感じた。

近年、豪雨災害や国際情勢、感染症などの影響で、高校協議会などの活動が中止、延期されることが多くなっているが、このような時こそ、指導者同士も色々なアイデアを持ち寄って、各学校の生徒たちの活動と成長の機会を工夫していくべきでは、と考える。微力ながら、賛助奉仕団の先生方や支部の協力を得ながら、今後も挑戦していきたい。

総合学科発表会での赤十字講座の発表

ＪＲＣ部の活動について

県立廿日市西高等学校　江上路可

廿日市西高等学校のＪＲＣ部は、年に２回程度全生徒に呼びかけ、校内で募金活動を行っている。昨年度は、西日本豪雨災害の義援金と台風19号災害の義援金の呼びかけを行った。生徒の中には、家中の小銭をかき集めて持って来て募金をしてくれたり、立ち止まって財布の中にある小銭を日々募金してくれる人もいて、ＪＲＣ部の生

徒には、人の優しさや思いやりを感じ取れる活動となっている。

６月に行う文化祭では、ＪＲＣについて知ってもらうために、ＪＲＣクイズに答えてもらい正解数に応じて非常食の景品を渡すという企画と災害時に役立つハイゼックスの実施を考え実行した。クイズを考えるにあたり、改めて確認することや新たに知ることなどがありＪＲＣについて学びを深めることができた。

文化祭でのＪＲＣブース

体育祭では、部活動対抗リレーで広島県支部より借りたけんけつちゃん、リスさん、うさぎさんの着ぐるみを着て走った。９月で暑さの残る日ではあったが、汗だくになりながらも献血の呼びかけのポスターを手に持ち、生徒や来場者にアピールすることができた。

青少年赤十字県大会では、平成30年度から午後の分科会で救急法競技大会を実施している。午前に行われる活動報告と午後の救急法競技大会での成績及び日頃の活動状況により高文連の推薦を受けて、全国高等学校総合文化祭ボランティア部門への参加が認められる。一次救命処置（心肺蘇生法・AED）と三角巾での包帯法の事前講習会に参加し校内で練習を重ね大会に臨んだ。練習不足で入賞することはできなかったが、目標を持って取り組めたことは、今後の活動への糧になった。校内で毎年開かれる救急救命講座にも積極的に参加し、生徒代表で心肺蘇生法を手本としてやり遂げる場面も実現した。

今後も、いざというときに素早く行動できるように練習を重ねて欲しいと願っている。

体育祭での献血ＰＲ

各学期に一度行われる青少年赤十字広島県高等学校協議会総会には、毎回出席し、他校で行っている活動報告を聞くことで刺激を受けている。高等学校は、小中学校の学校加盟とは違って部活動として加盟をしているので、学校では様々な思いや考えがあっても、なかなか行動に移せないことが多い。しかし、多くの学校が集結する高等学校協議会では、街頭に出てボランティア活動に参加したり、赤十字のＰＲ活動にも携わることができる。仲間と協力をして行動に移すことのすばらしさを高等学校協議会の活動で身に付けていくことができている。ここで学んだ力を学校生活の中で生かして欲しい。問題に「気づき」、問題解決の方法を「考え」、自ら解決方法を「実行する」態度を目標にして、仲間をつくり協力しながら主体的に活動を続けるＪＲＣ部員を応援する。

広島県立河内高校でのＪＲＣ活動について

ＪＲＣ部顧問　宮本忍

河内高校は目の前に沼田川が流れ、周りを緑に囲まれた自然豊かな環境に１１０年の歴史を持つ全校生徒１５６名の小規模校です。ＪＲＣ部に所属する生徒は少なく、現在は２名ですが年によっては部員がいない年もあり、継続した取り組みができにくい状況があります。

そこで、本校ではＪＲＣ部員と生徒会執行部が一緒になって学校全体でボランティア活動に取り組んでいます。

校内での活動として、美化委員を中心に花壇の手

入れを行い、生活委員と保護者で通学路清掃を行い自分たちが学ぶ環境を整えています。

本校が位置する東広島市河内町は、高齢者が多く、若者の人手が足りない状況です。そこで本校生徒にもイベントの手伝をして欲しいと地域から声をいただき、日頃の感謝の気持ちもあり、ボランティア・スタッフとしてお手伝いをしています。地域のイベントの「リバーサイド・フェスティバル」では地元の人と一緒にイベントを手伝い、「福祉ふれあいまつり」ではセレモニーの司会や手書き染色体験ができるコーナなどを企画し、イベントを盛り上げました。また、東広島で毎年行われる様々なイベントにもボランティア・スタッフと参加しています。

リバーサイド・フェスティバル

今年ＪＲＣ部に入部した２名の生徒は他校と交流するなか、エコキャップの回収や地元で行われる移動献血車での献血にスタッフとして呼びかけを行いました。様々な活動を通して「自分から考え、動くために何をすればよいかも分からなかったが、ボランティア・スタッフで活動しているうちに、だんだんと精神的に変化が生まれ、中学生の頃と比べて社交的になった自分を感じた。」と感想を述べており、もう一人の生徒は「ＪＲＣの活動でコミュニケーションの大切さを感じることができ、休日をつぶしてまでボランティアをする意味が分からなかったけれど、ＪＲＣのことを学び、活動をしていくうちに、自分がしていることは無駄ではないように思えるようになった。」と成長を語っていました。

福祉ふれあいまつり

また、夏に行われるトレーニング・センターに参加した生徒が、良い方向へ変化する姿をみて、他の先生方から青少年赤十字の活動を理解し協力してもらえる環境も増えつつあります。少しずつではありますが、校内に青少年赤十字の活動の輪が広がるようこれからも頑張っていきたいと思います。

「本校における青少年赤十字活動について」

広島翔洋高等学校　ＪＲＣ部　西村皇哉

広島翔洋高等学校は、ＪＲ広島駅から電車で20分くらいの安芸郡坂町にある私立の学校です。本校は、創立90年を超える長い歴史をもち、女子校から共学へ、校名変更など、時代と共に様々な変化もありましたが、普通科、ビジネス科のある部活動が盛んな高校です。

ＪＲＣ部も歴史が長く、その時々で、様々な青少年赤十字活動に取り組んできています。私たちのこれまでの活動としては、青少年赤十字の活動である夏のトレーニングセンターや日韓交流事業への参加、全国総文祭が広島県で行われた際にはスタッフとして参加、他県で行われた際にはメンバーとして参加、地域の保育園のお泊り行事にボランティアとして参加する等してきました。

また、毎年、続けて参加しているのが、薬物乱用防止キャンペーンのボランティア活動です。薬物乱用防止指導員や民生委員の方などと一緒に薬物乱用防止を呼びかけています。また、青少年赤十字の活

動である夏と冬の献血活動への参加も継続しています。現在は、男子２名、女子３名の５名で活動をしています。青少年赤十字の「気づき、考え、実行する」を行動できるように心がけています。また、私を含め２名が青少年赤十字広島高等学校協議会の役員をしており、なかなか十分にはできていませんが、少しでもみなさんのお役に立てるように頑張っています。

薬物乱用防止キャンペーン

私たちのこれからの課題としては、まず一緒に活動するＪＲＣ部の部員を増やしていきたいと考えています。また校外でのボランティア活動だけではなく校内での活動も増やしていきたいです。今までしてきたことを活かしながら、今までやってきてなかったことを見つけ、新しいことに挑戦していきたいと思っています。

崇徳学園インターアクトクラブの献血推進活動について

２年　有村　友希

崇徳学園インターアクトクラブは、人との関わりを大切にすることをモットーとし、主にボランティア活動を行っています。私は、中学生の時、すでに先輩たちが献血推進活動も行っておられ、右も左も分らぬまま、週に１回、先輩方と献血ルームの前で献血の協力を呼びかけることから始めました。それから、血液センターに見学に行ったり、研修会に参加したりする中で、少しずつ献血の重要性や若年層の協力が必要なことが分かってきました。

２０１７年１月には大雪の影響で、中四国地方で輸血用血液が不足する事態が予測され、本校に献血の協力要請がありました。緊急事態ということで、学校全体で迅速に対応し、急な呼びかけにも関わらず、高校生・教職員・ＯＢ関係から75名分の４００㎖献血があつまりました。私も献血が出来るようになったら協力しようと思っていましたが、一人で行くのは少し不安だったので、16歳になって初めて献血に行く時には友達を誘いました。最初は針を刺されることに緊張していましたが、献血ルームの雰囲気や看護師さんの優しい声かけにより、すぐにリラックスできました。これなら、気軽にどんな人でもできると感じました。献血により、病気で血液を必要としている人が元気になることを考えると、これくらいなら簡単にできると思いました。

学校での集団献血

また、学校で献血についてもっとＰＲして、たくさんの高校生に協力をしてもらいたいと強く思うようになりました。先生にも相談して、学校全体で献血推進活動を行うために、まず献血の重要性について理解してもらうことが大切と考え、血液センターの方に講演会を行っていただくようお願いしました。多くの高校生が献血の重要性について知ることで、今までよりも積極的に献血に協力をしてくれる人が増えたようです。また、今年度からは、主に卒業生を対象として行う「卒業献血」を、年２回に増やし、献血バスを呼ぶことにしました。１回目は気象警報で学校が休校となり実施することができませんでしたが、10月に実施した時は、４００㎖献血86名という結果で、以前より少し増えました。２月にも予定していますが、次は１００名以上の献血を目標に学

校全体で取り組んでいきたいと考えています。地道な活動ですが、より多くの人に献血について興味をもってもらい、卒業後も献血に協力してくれる「崇徳生」を増やすために、今後も精進したいです。

卒業献血呼びかけ

（地域奉仕団の活動）

青少年年赤十字加盟校の普及を目指して

呉市赤十字奉仕団委員長　佐藤　光子

私の好きな言葉の一つに「おかげさまで！」があります。小さいころから周りの人たちの会話の中に「おかげさんで！」「おかげよの！」としばしば耳にしていた言葉です。日常会話の中で当たり前のごとく聞き流した言葉ですが、大きくなるにつれ、この言葉の意味を考えるようになりました。自分なりに解釈したのが「ありがたいことよ」「ありがたや」の感謝の言葉ではないかと思うようになりました。どのようなことでも一つの事を成し遂げるのに、一人だけの力で成し遂げられることはありません。一つのことを成し遂げるには、多くの陰の力があり、その陰の力に対して「おかげさま」であると感謝の気持ちが言葉となり出てくるのだと実感した時、なんといい言葉だろうと思いました。

昨今、人と人との関わりが乏しくなり、白黒はっきりするような関係性が強調されるようになってきているように感じています。本来、人間の心の問題は目には見えない力で成り立っており、白黒つけられるものではありません。ちょっとした気配り、思いやり、慈悲の心などで人間関係は成り立っています。しかし、そうした心を配る場、心を養う場が失われつつあります。この心を養っていく過程において日本赤十字社の理念である「人道・博愛」の精神が最も適していると思い立ち、呉市赤十字奉仕団員の方々のみならず、「青少年赤十字」への加盟校を広げたいと思うに至りました。

ある論説によりますと、１９７２年にローマクラブという国際組織が「成長の限界」を警告しています。世界の人口増加や環境汚染が続けば、２０３０年には人類は衰退していく。そしてそれは、ほぼ予想通りに推移しており、環境破壊や貧困が進み、事件、テロが相次いでいることからも明らかです。それを防ぐための教育も進められ、その危機感から未来をつくっていく人を育てる教育の重要性も説かれています。これから自らが何を学び、何が出来るか考え、行動できる人間を育てていかねばならない時に、人道・博愛の精神を共に学び実践していくことはこの上なく近道のような気がしています。

○ＪＲＣ加盟校促進への働きかけ

前述のような考えのもと、学校へ働きかけをしようと考えました。そこで、呉市教育長の寺本有伸先生を訪問し了解を頂いて、呉市の小・中学校校長会に出席をさせて頂き、ＪＲＣの説明をし、申込書を配布致しました。その後、近隣の学校へは直接訪問し、ＪＲＣの活動など、詳しく話をさせてもらいました。

高等学校へは、直接、コンタクトをとりながら一校づつ訪問し、校長先生に加盟へのお願いをしているところです。そのような中で、私立の呉青山中学・高等学校は、加盟後すぐに、年末の行事であります呉市赤十字奉仕団の大掃除に全校生徒１５０人余りと同校の斎藤校長先生以下、20数名の先生方が参加してくださいました。そしてこの学校は、学校内の防災訓練に日本赤十字社広島県支部の講師を依頼され、授業の一環として取り入れていただきました。

また、同じく呉市立片山中学校も、加入後すぐに、防災訓練の後、地域・赤十字奉仕団員と共に、日本赤十字社の説明から、ボランティアや緊急の事故の訓練に至るまで、実践教育を受けていただきました。

呉赤十字奉仕団の年末に「愛の募金活動」を行っていますが、この街頭募金に加盟校の呉三津田高校、呉青山高校、呉工業高校が参加し、未加盟でこれか

呉市年末大掃除

ら行く予定の広高校の生徒さんが自主的に８人参加していただきました。寒い中でも大きな声を出して募金を呼び掛けてくださり、頼もしく初々しい姿を見せてくれました。そして、生徒さんたちが「この活動に声をかけてもらい本当に嬉しかったです。またぜひ、声をかけてください」と次の参加も約束してくれました。

また、大掃除も大変多くの中高生が参加してくださり、掃除道具が足りなくなるハプニングもあり、奉仕団員が喜んだのはもちろんのこと、参加した生徒の一人が学校長に言った言葉にさらに感動いたしました。「町がきれいだと、心もきれいになりますね！」と。若い人の力は、大きなエネルギーを産み出すようで、奉仕団一同大きな力を頂きました。

呉市年末募金活動

先行きが不安になるようなニュースにあふれている昨今ですが、中高生のみなさんと活動を共にすることで大いなる期待と夢を持ち、また、赤十字奉仕団の活動が「こころ」を養う場としても大いに期待できるものがあるのではないかと思い、青少年赤十字への加盟校を一校でも増やしていけるよう努力してまいりたいと思っています。

（特殊奉仕団の活動）

青少年赤十字広島県大会での無線奉仕団の活動展示

広島県アマチュア無線赤十字奉仕団
顧問（前委員長）　平川公司

昨年国泰寺中学校で開催された青少年赤十字広島県大会に広島県アマチュア無線赤十字奉仕団として活動の一端を紹介するブースを設け、無線を使った情報伝達の活動を紹介する機会を得ました。ＪＲＣ県大会で行うこのような啓発活動は、平成26年より本奉仕団田邊吉則広島分団長（現 本奉仕団委員長）がその取り組みをはじめ、過去５回参加してきました。若い世代が、少しでも我々特殊奉仕団の活動に興味を抱き、奉仕団活動の多様性に気付いてくれればとの願いをもって継続しております。

展示は活動紹介のパネルと無線機を数種類用意しました。昼休憩には資格の要らない簡易無線機を使っての通話体験にチャレンジする機会をつくりました。携帯電話やスマートフォンが日常生活のアイテムとなっていますが、トランシーバによる無線通信の有効性や特性を知ることは、豪雨や地震などの自然災害発災時に身を守る術の一つを知ることにもなります。興味を示してくれる者はいくらかはいるものの、新団員確保にはほど遠い状況ですが、奉仕団の活動の内容を知ってもらうだけでも成果があると思っております。

また、ＪＲＣ県大会に参加することは、若い人たちの思いも知ることができ、大いに得るところがあります。今後とも本奉仕団としてこの取り組みを継続していきたいと考えています。

（賛助奉仕団員の活動）

地域奉仕団との協働

顧問　横田二郎

東広島市赤十字奉仕団（以下、市奉仕団）と広島

県青少年赤十字賛助奉仕団（以下、賛助奉仕団）との協働した活動について報告します。

○協働までの経緯

市奉仕団では、かねてから東広島市内における青少年赤十字の普及を目的としての活動を続けてきました。しかし、賛助奉仕団と連携した活動は名目・名義的な範囲に止まっていました。今年度に入ってから両奉仕団間で協働の話し合いが始まりました。

○東広島市長・教育長表敬訪問。

令和元年7月3日市役所に賛助奉仕団（日高委員長、横田顧問）、市奉仕団（西信顧問）の3名が訪問し、青少年赤十字（以下、JRC）活動への平素からの感謝とお礼を申し今後更なるご指導・ご協力をお願いしました。教育長からは、2学期早々に実施される東広島市立小・中学校長会に臨席してJRC加入促進の願いをしてはとの示唆いただきました。

○協働への協議

市奉仕団・新林委員長からの要請により、令和元年7月26日、東広島市市役所別館において、賛助奉仕団（日高委員長、横田顧問）、市奉仕団（新林委員長、武内副委員長、端本副委員長、西信顧問・辻委員・早稲森団員）の8名出席で協議が行われ日高委員長から「JRC加盟促進のための学校訪問協働案」の前向きの積極的な提案がなされ、市奉仕団からの異論は出ず、協働への道が拓かれました。

○両奉仕団協働しての学校訪問

前項の協議に基づいて、学校訪問実施案が協議・計画され、8月19日を第1回として9月20日までに合計14校を対象に実施されました。第1回訪問校へは両委員長と竹内副委員長、横田顧問が参加できましたが、第2回目からは市奉仕団の正副委員長の都合がつかず、従来から学校訪問の実務を担当してきた横田顧問、西信顧問、高校生時代にJRCを経験した早稲森美代子団員の3名が日高委員長に随行することになりました。学校訪問での情報交換にあたっては、当該校の状況の聴取、こちらからは県内のみならず全国的な活動などを提供しました。

訪問対象校は次のとおりです。

加盟校　市立（吉川小学校、小谷小学校、造賀小学校）、県立（広島中学校、河内高校、西条農業高校、広島高校）

未加盟校　市立（東志和小学校、原小学校、寺西小学校、中黒瀬小学校）、県立（賀茂高校、黒瀬高校、豊田高校）

○2学期東広島市立小・中学校校長会議でのPR

標記の会議が令和元年9月3日東広島市三永地域センターにおいて行われました。この標記の会議に青少年少年赤十字広島県指導者協議会三浦義之会長、日本赤十字社広島県支部組織振興課黒川一成課長、賛助奉仕団日高委員長の3名が臨席しそれぞれの立場から青少年赤十字活動へのご協力に謝意を表し、JRC加入促進へのご協力をお願いいたしました。随行した横田顧問西野部顧問は同場において東広島市教育委員会教育長に平素からの赤十字へのご指導ご協力に謝意を表しました。

○加盟校との情報交換と活動報告資料等の受領

学校訪問後の情報交換を青少年赤十字活動実務担当者が来ない、「青少年赤十字展」への出展資料等を受領しました。

○東広島市青少年赤十字展を実施

令和元年11月9・10日、広島市芸術文化ホールにおいて開催された「第29回東広島市生涯学習フェスティバル」に参加出展しました。

東広島生涯フェスティバル・JRC展示ブース

本年は両方師団の実質的な協働による初めての催事であり、賛助奉仕団員・市奉仕団と共に準備等にあたりました。展示物は、青少年赤十字標章旗・青少年赤十字（JRC）って何？・トレセン紹介・赤十字の誕生について・青少年赤十字活動について・加盟校活動紹介・各種奉仕団について等です。

「観る展示」だけでなく、椅子に座って机上の資料等により「学ぶ展示」を企図しましたが、会場の位置を含めて、更に工夫検討の必要を想わされました。

来場者　9日4500名、10日4300名

○東広島市内青少年赤十字加盟校の青少年赤十字活動報告書の配布

広島県教育委員会平川理恵教育長の挨拶、青少年赤十字（ＪＲＣ）って何？、青少年赤十字広島県小学校トレーニングセンター、ＪＲＣ加盟校一覧、各加盟校の活動報告、東広島市赤十字奉仕団・広島県青少年赤十字賛助奉仕団の紹介、等を内容とした12ページ。「東広島市青少年赤十字展」会場で配布するとともに広島市教育委員会青少年育成課のご厚意により逓送便にて市立学校全校に配布していただきました。

○今後への展望

両方師団の協働による青少年赤十字活動への対応がより確かなものとなり青少年赤十字加盟校の活動が充実するように祈念しています。

生涯現役

一昨年から二つ目の癌と戦いながらも、青少年赤十字ボランティアの生涯現役でありたいと思っています。

合掌

マインドフルネスと青少年赤十字について

顧問　田中　博

私は現在、「ＮＰＯ法人ワンシード」という会の顧問をしている。会の主な事業は「マインドフルネス」の普及である。マインドフルネスについて説明しなければならない。仏教用語「念」の英語訳がマインドフルネスで、今この瞬間に気付いていることの意味に使われている。これは、日本の禅宗から宗教色を除き、精神と技法を残したもので、米国やヨーロッパではこの考え方と技法は一般に広く取り入れられている。そして、わが国には、いわゆる逆輸入の形で入ってきているのである。

今のわが国の現状を見ると、幼児虐待、親子の殺人などが報ぜられ、その悲惨な姿を目にしたとき、心を育てる教育（EQ）の欠落を覚えるものである。

国連は持続可能な開発目標SDGs17（国連開発計画）として、（1）貧困をなくそう（2）飢餓をゼロに（3）すべての人に健康と福祉を（4）質の高い教育をみんなに、など17項目を掲げている。そして、２０３０年までに貧困に終止符を打ち、豊かさと人々の福祉を促進しつつ環境を保護することをめざし、可能とするために、大きな愛を各国に呼びかけている。

私たちのグループ（ワンシード）も、絶対的平和主義の大きな理念の下で、実践するには手堅く具現化していこうと申しあわせて活動している。指導者は、マインドフルネスの精神と技法を用いて気づく感性を養うことに力を入れている。地域、保育園、小・中・高校で、子どもから大人まで本当の自分を豊かに生きることを願い普及を通してサポートしている。

さて、今言っていることは、赤十字の理念と一緒ではないか。私は青少年赤十字に関わっている者。各所において自信をもって呼びかけ助言していこうと思う。

小学校トレーニングセンターに参加して

副委員長　河戸　靖子

令和元年８月21日から２泊３日の計画で広島県小学生ＪＲＣトレセンが実施された。以下はその報告である。

「僕の名札があったぞ」「えーと、私は何ホームかな」今年も青少年赤十字加盟校から参加してきた５年生児童の歓声が丘に響き渡る。やがて趣旨と注意事項が書かれている説明板を読んで、顔を赤らめた児童がはっと気づき、無言で荷物を置き、行動開始して開会式に臨む。

第１日目は、アイスブレイクに続き、「赤十字の誕生」のお話を聞き、ＨＲ-ＶＳ、入浴、夕食後の救急法、ＨＲ代表者会議、先見・・と実に内容の濃い一日であった。

第２日目は、朝の集いに始まり、午前はいよいよ「青少年赤十字の誕生と活動」の内容に始まり、次に「点字」・「手話」・「車椅子・高齢者体験」の選択学習と続く。この選択学習はホームルームのメンバーに自分が体験した大切な内容を正確に伝えなければならないという目的が課されている。

そして午後は、参加児童が最も楽しみにしているフィールドワークとその授賞式。仲間の絆もぐっと深まった。

夜は、赤十字が行う防災教育の体験と学習が行われた。参加児童の中に西日本豪雨災害時に避難所に避難した児童も含まれていたので、事前に心の安定を図る絵本「こわい目にあったアライグマくん」の

読み聞かせと呼吸法を行った後に、「ＪＲＣ防災教育プログラムの『まもるいのちひろめるぼうさい』の映像と資料を活用した。この学習活動においては、先見（危険を予測し）、気づき（問題点を見つけ）、考え（何をすべきか）、実行（命を守る行動）の手法のもと、防災教育の必要性を児童が受け止めてくれることをめざしている。今後もトレセンの中で引き続き取り組みたい内容である。

ケガの手当て法

第３日目、各自、「これからの活動」の内容で新聞づくりに取り組んだ。参加児童が自分たちの学校に帰って、何を伝え、何を実践していくかを綴っていった。ここでスタッフが気づくことは、初日と最終日の児童の表情が全く違うことだ。三日間を通して、日々の目的・実践が学びにつながり、仲間意識も強くなり、この新聞づくりの児童の表情につながっていることがわかる。この個々の決意表明が学校の中で生かされていってほしいものである。

本県では、指導スタッフがトレセンの目的をしっかり理解して運営することを心がけているので、児童が成長する姿が目覚ましい。来年もかくありたい。

最後のグループワーク「新聞づくり」

府中町立府中中学校青少年赤十字登録式・いとすぎ植樹に参加して

副委員長　山中章敬

4月22日府中中学校で青少年赤十字登録式といとすぎ植樹祭が行われました。県支部の森川さんと賛助奉仕団の幹事長の寺田先生とで参加してきました。

いとすぎ植樹は、賛助奉仕団の活動の一つで、赤十字の発祥の地であるソルフェリーノの丘（イタリア）に群生している「いとすぎ」を奉仕団のメンバーが種から苗を育て加盟校に植樹をする活動です。

府中中学校は、青少年赤十字加盟の歴史が最も長い学校の一つであり活動が活発であることや大規模改修が終わったばかりで新たな学校の歴史の出発点であることをなどから府中中学校を平成29年度の植樹祭を行う学校に選んでいました。しかし、行うはずだった植樹祭は、昨年7月の西日本各地で被害を出した豪雨災害により、府中町も土砂災害や河川の氾濫などで、町内各地で被害を受けました。さらに、豪雨が過ぎ去ったあと学校が再開した天気の良い日に、まさかの榎川上流からの土石流で、校区内の数か所で道路や宅地に土砂が流れ込むなどの被害がありました。そのようなことで延期され、今年度の登録式と、いとすぎの植樹祭が同じ日に行われることになりました

登録式は、府中中学校の先生や生徒が豪雨災害の経験をしたこともあり、例年より真剣にそして整然とおこなわれたように感じられるほどでした。青少年赤十字の一員であることの自覚、一人ひとりを大切にすること、より良い学校や地域にしていくことの大切さその意味を理解し、「気づき、考え、実行」する態度でこの一年を頑張ることの大切さを確認し登録しました。

登録式の後の植樹祭は、全校生徒を代表して生徒会のメンバーで行われました。府中中学校の青少年赤十字が赤十字のシンボルツリーのいとすぎとともに成長していくよう願いながら、植樹祭はおこなわれました。

府中中学校の登録式・植樹祭に参加し多くのことが感じられました。中でも、豪雨災害被災後、府中中学校の生徒や保護者の多くの方が、土砂の運び出しなどのボランティアに参加し頑張ったことなどの話を聞き頼もしくそして府中中学校の一層の活躍が期待が確信できます。ありがとうございました。

生徒会の皆さんによる「いとすぎ」の植樹

青少年赤十字奉仕団に加入して

団員　雲地和典

昭和59年大和町内の小学校に転勤したのが青少年赤十字との出会いでした。その頃の町内の後光が青少年赤十字の加盟校で大和町青少年スポーツセンターで県トレーニングセンターが行われていました。

「町内なので手伝ってくれ」の言葉にキャンプ大好きの私は軽い気持ちで小学校のスタッフで参加しました。しかし JRC について何も知らないままで、手伝うというよりも尋ねてばかりでした。

その後、山梨での「青少年赤十字中央講習会」に参加させていただき、全国から集まった先生方と」RC 漬けの日々を過ごし「青少年赤十字」どっぷりと浸かってしまうことになりました。そこから転勤するたびに加盟校であり、気づけば23年間スタッフとして参加させていただきました、

トレセン1日前に集まり、準備、ワクワクする三日間が始まります。参加されるスタッフの先生方や日赤の方々と会うのは、1年でこの数日間でしたが、多くのことを学べとても充実し自分にとって一年の大きな楽しみでした。

当時の思い出としては、フィールドワークです。その頃は小学校・中学校・指導者 が一緒にしていたので、問題づくりや賞などの準備や関所を一緒にしていました。色々な得意分野を持ったスタッフの方々との交流ができてとても楽しみでした。フィールドワーク後の講評もそれぞれ個性がありました。

初めの頃は農道を通り南側の山道からグランドに降りていました。その山道の中に「無言の国」の関所があり、グランドから「無言の国」の児童・生徒に向かい「スイカが冷えとるどー。返事せー」とハンドマイクで叫んでいました。（わかる人は少ないでしょうね）

白竜湖畔にコースや内容を変えたのは、土砂崩れがあり危険になったからでした。そのフィールドワークで感心したのは、「重さの国」で、ネパールから頂いた瓶（ネパールでは水道がないので、この大きな瓶に水をいれ子供たちが家まで運ぶのが仕事でした）に入れた水の重さを問題にした時、いろんなホームが持ち上げて概測しましたが、保育士さんのホームは瓶を抱っこして、「〇〇ちゃんの体重くらいだから・・・」と重さを答えていた場面です。ぴったり当たりました。

思い出を書くと紙面が足りなくなりますのでまたの機会がありましたら楽しい話を紹介します。

現在は再雇用で頑張っています。「青少年赤十字賛助奉仕団」え声をかけていただき、育てて頂いた青少年赤十字に関わればと加入させていただきました。少しでもお手伝いできればと思っています。よろしくお願いします 。

令和元年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会（徳島大会）

幹事長　寺田宣文

令和元年度の中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団研修会は、10月10・11日金）の2日間、徳島市において開催されました。広島県からは、日高敬司委員長はじめ4名が参加しました。

広島県内での青少年赤十字活動では実際に知ることと見ることが出来ない真実と場所がここ徳島県にあ

ります。

一つ目は、ハンセン病問題の事実を今も伝えてくれるハンセン病診療所「大島青松園」がここ徳島にあること。二つ目が、第1次世界大戦時に日本軍の俘虜（捕虜）となって、４７００人のドイツ兵が日本各地の収容所に収容され、このうち、１０００人のドイツ兵がここ徳島県鳴門の俘虜収容所で３年間過ごした事実です。

１日目の講演「ハンセン病回復者との交流に学ぶ～無知からの偏見・差別」で、徳島県ハンセン病支援協会の十川勝幸氏のお話がありました。このお話で強く感じたことは、「事実を知らない」ことによって、知らず知らずのうちに人権を侵害してしまうこと。正しく理解することが偏見や差別を解消するために大切だということです。

わが国では、今、約２３００人の方が国立療養所と私立療養所で療養しています。徳島県「大島青松園」には１００名の方が療養に励んでおられます。すでにハンセン病は治っていますが、ハンセン病に対する偏見や差別はいまだ根強く、社会復帰を妨げている現状があります。徳島県と徳島県ハンセン病支援協会では、入所者との交流会や里帰りの支援、本県出身者が入所されている他の療養所への訪問活動、正しいハンセン病の理解のために街頭啓発などの活動をしています。徳島県青少年赤十字賛助奉仕団も一緒になって活動されています。

２日目は鳴門市にあるドイツ村公園「板東俘虜収容所跡地・赤十字ゆかりの地モニュメント」ドイツ館訪問でした。ベートーベンの「第９」の日本発祥の地が、徳島での俘虜収容所での演奏であることは知っていましたが、詳しい経緯まではわからなかったので、この度の当地探訪によって改めて知ることとなり、それが赤十字と重なっていたことにかんどうしました。ここ板東俘虜収容所では、捕虜となったドイツ兵に人道的待遇で接し、ドイツ兵の人権を最大限に尊重した施設運営がなされたそうです。これは、世界でも前後例のないことです。長らく忘れられていたこの地に、平成23年に日赤徳島県支部が赤十字ゆかりの地モニュメントを設置し、赤十字の人道のよりどころと定めたことに敬意を表したい気持ちです。

板東俘虜収容所跡・赤十字ゆかりの地モニュメント

徳島での中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会は、赤十字の中心的理念である「人道」について、あらためて考えさせられる集いでした。中・四国９県が一堂に会し意見交流できたことに感謝したいと思います。

平成31・令和元年度青少年赤十字賛助奉仕団総会（報告）

幹事　采谷宣子

今年度の総会は、４月19日午前10時から日赤県支部において開催しました。

１　平成30年度事業および会計報告について

会計監査は３月27日、日赤県支部にて行いました。また、４月12日の役員会及び４月19日の総会で事業報告と会計報告の承認を得ました。

２　平成31・令和元年度事業計画及び予算について

役員会及び総会にて決定しました。上記１・２については、総会資料を別便でお送りしたとおりです。

３　今年度の行事等について

・中四国ブロック大会には研修および親睦を兼ねてできるだけ参加するよう申し合わせました。

・いとすぎプロジェクトの推進のため、いとすぎの苗を育て、県内の学校に植樹する活動を引き続き推進します。

・夏のトレーニングセンター（トレセン）、指導者協議会、県大会、各研修会等への参加、日赤県支部の活動に積極的に協力することを申し合わせました。

平成31・令和元年度青少年赤十字賛助奉仕団活動報告

幹事長　寺田　宣文

4月12日　第1回役員会
4月19日　賛助奉仕団総会
4月19日　青少年赤十字指導者協議会総会
4月22日　登録式といとすぎ植樹行事
5月3～5日　フラワーフェスティバル参加
6月10日　広島県赤十字奉仕団委員長会議
7月6・7日　青少年赤十字指導者研修会
7月9・10日　全国賛助奉仕団総会（東京）
8月17～19日　トレセン（中学校）スタッフ
8月20～22日　トレセン（小学校・高校）スタッフ
10月10・11日　中四国ブロック賛助奉仕団連絡協議会研修会（徳島市・鳴門市）
10月26日　青少年赤十字広島県大会
11月15日　第1回機関紙編集会議
1月15日　第2回機関紙編集会議
2月14日　第3回機関紙編集会議
2月14日　広島県青少年赤十字研究会
2月18・19日　奉仕団委員長研修会
2月20日　島根県高尾小学校来県
3月27日　第2回役員会及び機関紙発送作業

◇青少年赤十字登録式　支援事業
保育園2園、小学校3校、中学校8校、熊野町赤十字祭り

◇いとすぎプロジェクト推進事業
安芸郡府中中学校への植樹

◇地域奉仕団と連携して学校訪問、
小学校 7校、中学校　1校、高校　6校

平成30年度青少年赤十字加盟概況（加盟校数・加盟率）

平成30年度青少年赤十字加盟校数
（単位:園、所、校）

	全国		広島県	
校種	加盟校数	加盟率	加盟校数	加盟率
幼稚園	842		8	
保育園	872		26	
小学校	7,089	35.5%	136	27.9%
中学校	3,536	34.0%	90	33.1%
高等学校	1,911	38.6%	41	31.1%
特別支援校	185	16.2%	6	33.3%
合計	14,435	34.9%	307	30.0%

※加盟校数は、「平成30年度青少年赤十字の概況」から掲載

令和元年度広島県賛助奉仕団役員

委員長　日高敬司
副委員長　河戸靖子、野田　崇
山中章敬
幹事長　寺田宣文
幹事　采谷宣子
監事　下野玲子、吉丸朝美
顧問　横田二郎、光本涼子
曽山和彦、田中　博
塚本晃史、平越幸男
水野善親、

編集後記

今回も県教育長　平川理恵様からご寄稿をいただき、改めてお礼を申し上げます。

編集方針として、幼・小・中・高校すべての校種と、特殊奉仕団及び地域奉仕団の報告を掲載しました。特に高校のＪＲＣが活発に動いているので４校の実践を掲載しました。

また、地域奉仕団から地域の学校に働きかけがあり、特に呉地域では地域奉仕団と中学・高校との連携した奉仕活動が生まれています。

今年度の中四国ブロック大会は徳島市で開催され、４名が参加しました。協議会での意見交換や、板東俘虜収容所跡地・赤十字ゆかりの地モニュメント・ドイツ館の訪問は、当時世界で最も進んだ捕虜の扱いであったことに日本の誇りを感じました。

これからも団員の結束をはかり、いとすぎの苗を学校に植樹する活動や、学校訪問、赤十字加盟登録式における講話など、赤十字活動の啓発に邁進したいと思います。同時に、皆様の活動は機関紙を通してお伝えしていきますので、今後ともどしどしお寄せ下さるようよろしくお願いいたします。

○編集委員

曽山和彦、日高敬司、河戸靖子、野田　崇
采谷宣子、山中章敬、寺田宣文